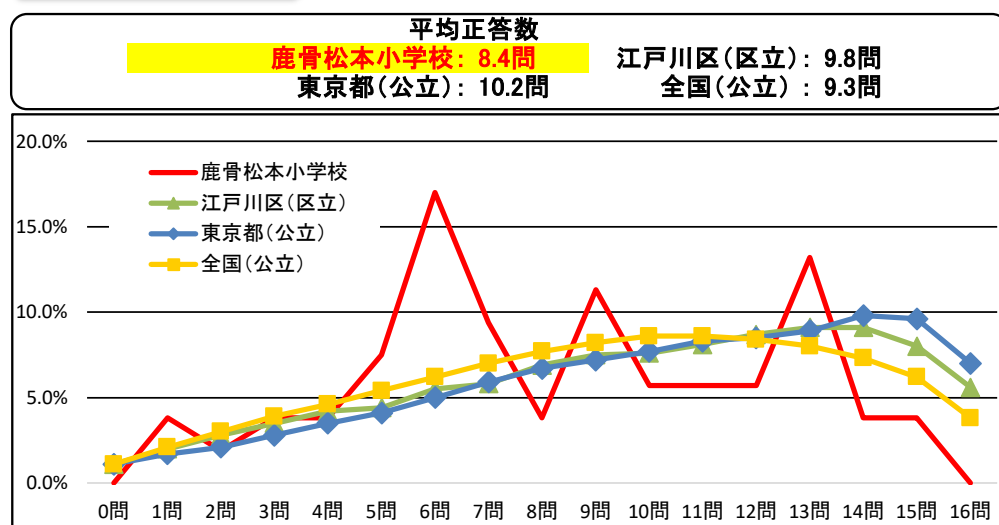


令和7年度全国学力・学習状況調査 結果分析表【算数】 鹿骨松本小学校

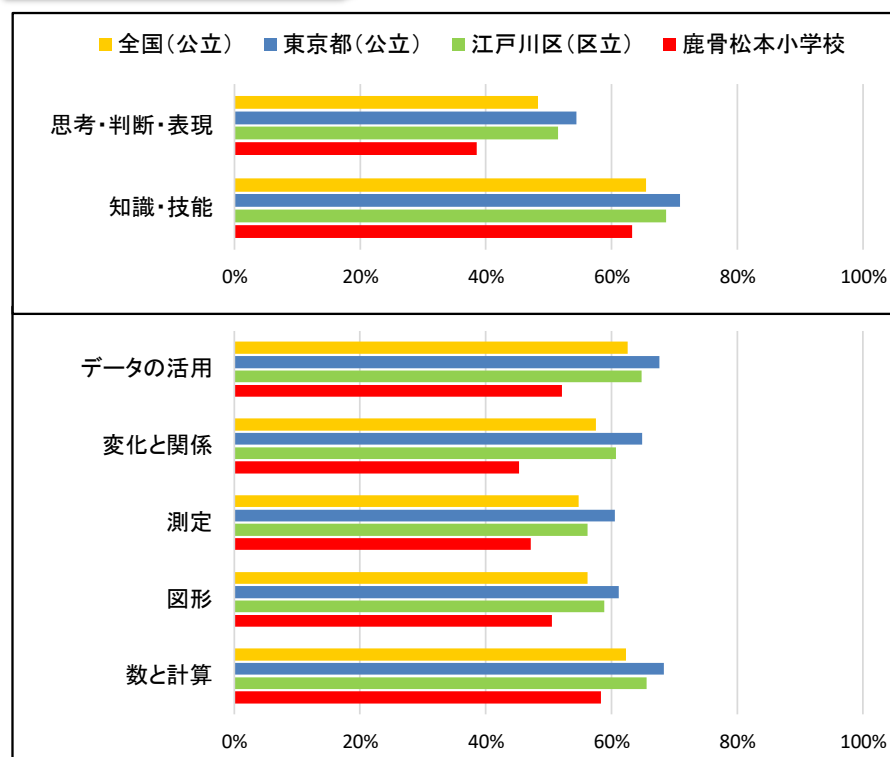
正答数分布



【平均正答率の差】

鹿骨松本小学校	52%
江戸川区(区立)	61%
東京都(公立)	64%
全国(公立)	58%
都との差(ポイント)	-12.0

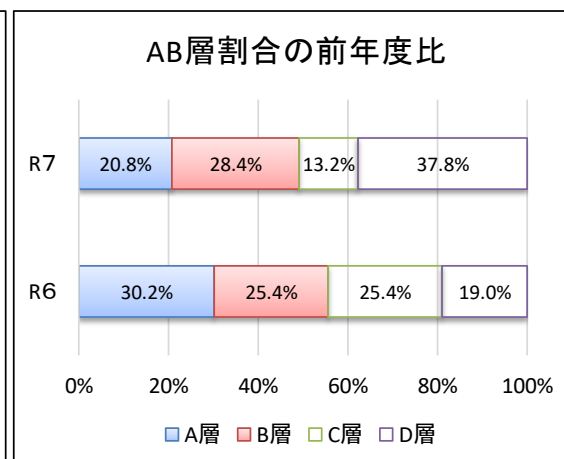
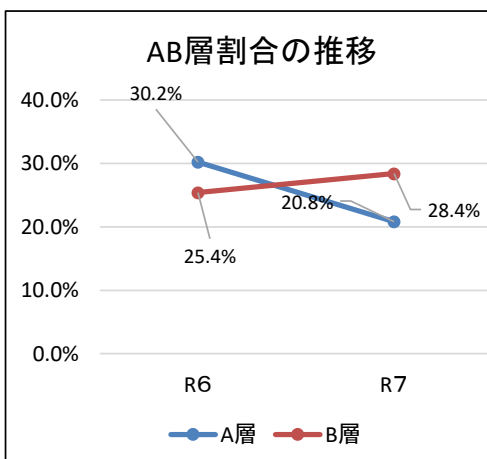
「領域別」の結果



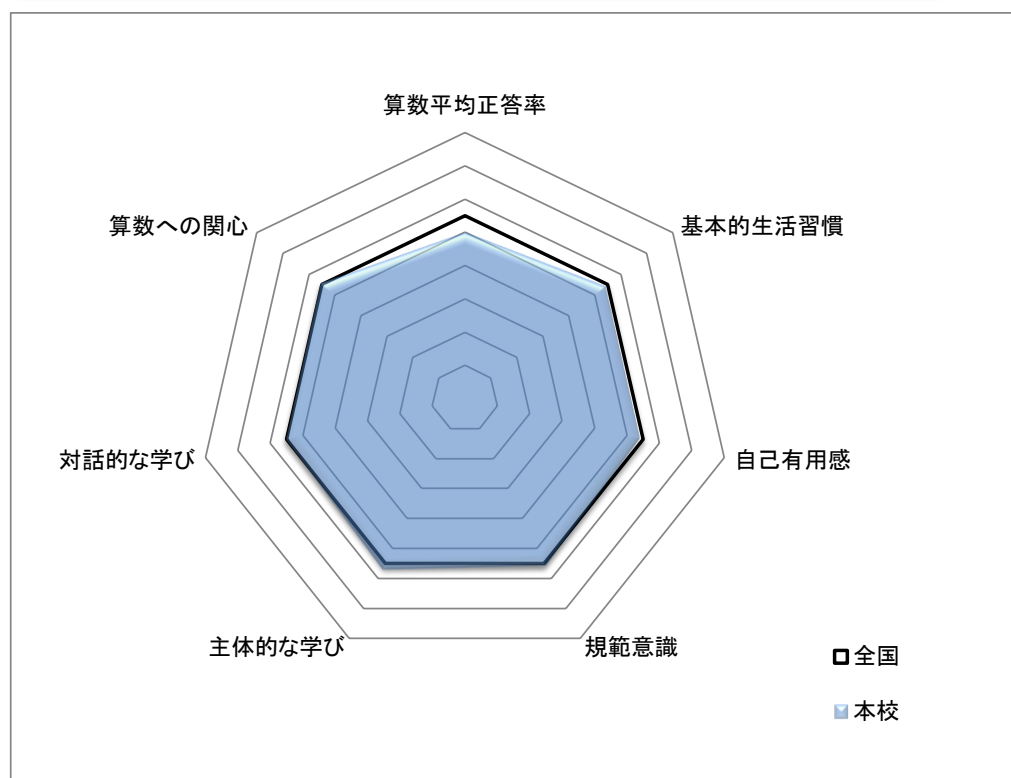
四分位における割合（都全体の四分位による）

算 数	上位 ← 下位			
	A層 14～16問	B層 11～13問	C層 7～10問	D層 0～6問
鹿骨松本小学校	20.8%	28.4%	13.2%	37.8%
江戸川区(区立)	22.7%	25.9%	27.9%	23.5%
東京都(公立)	26.4%	25.7%	27.6%	20.3%
全国(公立)	17.3%	25.0%	31.4%	26.3%

四分位とは、データを値の大きさの順に並べたとき、児童数の1/4、2/4、3/4にあたるデータが含まれているのはどの集合かを示すものである。下の表では、四分位によって児童をA、B、C、D層に分けた時のそれぞれの層の児童の割合を示している。なお、本データで示している四分位は、東京都(公立)のデータを基に定めている。



各領域における、全国平均正答率及び、全国の肯定的回答合計値を基準とした場合の、本校の様子。



《チャートの特徴》

- ・「算数への関心」に関わる内容である「算数が好き」に肯定的な回答をした児童は55.5ポイントで、全国57.9と比較し-2.4ポイントであった。
- ・「算数の授業がよく分かる」に肯定的な回答をした児童は81.4ポイントで、全国78.3と比較し+3.1ポイントであった。
- ・自己有用感、規範意識に肯定的な回答をした児童は、全国と同程度であった。

《家庭・地域への働きかけ》

- ・計算だけでなく「考える問題」にも取り組む習慣づくりを応援してもらう。
- ・家庭学習では、短時間でも継続して取り組む姿勢の定着を協力してもらう。
- ・買い物・料理・時刻・地図など、日常生活の中で「数の意味」や「量・変化」を話題にする機会を増やしてもらう。
- ・地域の図書館等の利用を促し、学習時間の格差を縮小する。

《現状把握》

- AB層の割合と取組内容について
- ・本校の平均正答率は52%で東京都平均64%より12ポイント下回る。
- ・四分位では、A・B層が49.2%で区48.6%よりわずかに高い一方、D層が37.8%と区23.5%・都20.3%より大きい。
- ・領域別では、「知識・技能」は63.3%で一定の成果がみられるが、「思考・判断・表現」は38.5%と課題が大きい。
- ・内容領域では特に「測定」「変化と関係」「データの活用」で、区・都平均と10～15ポイントの差がある。

《学校の取組》

- ・教員の指導力向上
- ・学力向上・研究部で「思考を言語化させる発問」「根拠を説明させる板書構成」を重点化する。
- ・ICTを活用した共有・比較活動を取り入れ、思考の可視化を進める。
- ・授業相互参観を通じて、単元構想の質を高める。

・基礎学力の保障

- ・朝学習(算数週2回)を位置付け、計算・基礎技能の定着を図る。
- ・単元前後での形成的評価をより明確化し、つまづきに応じた手立てを早期に行う。
- ・5・6年の発展的課題の充実を図り、AB層の割合を安定させる。
- ・希望制放課後補習教室の実施

・学習習慣の確立

- ・学期1回の江戸川っ子study week(家庭学習週間)を充実させ、計算と文章題の両面を扱う。
- ・昼読書と組み合わせ、文章問題への抵抗感を減らす。
- ・家庭での学習時間の差を縮める働きかけを継続する。

・AB層の育成

- ・基礎問題の確実な定着と活用問題への橋渡しを重視し、朝学習(算数)を通して計算力・基礎技能の向上を図る。
- ・思考力問題での課題を踏まえ、「図や言葉で説明する活動」を単元に位置付け、考え方を可視化する学習を強化する。
- ・単元末の振り返りで自分のつまづきに気付く機会をつくり、AB層に向かう学習姿勢と習慣を身に付けさせる。
- ・ドリルパークの活用により、個々の弱点補充とAB層へのステップアップを継続的に支援する。